

平成27年度第7回岡山市総合教育会議

日時：平成28年2月5日（金）

場所：市庁舎 第3会議室

○司会 定刻となりましたので、ただいまから平成27年度第7回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は奥津委員が御欠席ですが、運営要綱の定めにより会議は成立いたしております。傍聴の希望がありますが入室を許可してよろしいでしょうか。

（「お願いします」の声あり）

○司会 傍聴者の入室を許可します。

＜傍聴者入室＞

○司会 それでは、協議事項に移らせていただきます。

議事の進行は、招集権者である市長にお願いしたいと存じます。

市長、よろしくお願ひいたします。

○市長 きょうはお忙しいところ、ありがとうございます。

早速ですが、次第に沿いまして議事を進めたいと思います。

この総合教育会議では、創志学園の大橋理事長、また就実学園の千葉理事長から、学生の力を教育現場の活性化に生かしていくべきとの御提案がありました。その重要性に鑑み、会議で議論を深めていくことといたしたいと思います。その具体的な考え方、また進め方に係る教育委員会からの提案につきまして、教育長から御説明をお願いします。

○山脇教育長 それでは説明をさせていただきます。

今、市長さんからもお話がありました、これまでの会議の中で大橋理事長さん、千葉理事長さんから学生の力をもっと学校の中にあるとか、もう一つ、主体的に学生さんの動けるような組織づくりをしていくことも大切ではないだろうかというようなお話もいただいてきておりました。

学生さんが入って補助というだけじゃなくて、子どもたちと話し相手になることも大切なのではないだろうかという声も、その時点ではお聞きをしてきたわけでありまして。そういうことで、これまで岡山市が取り組んできていた学生ボランティア制度を少し見直して、改善を図っていこうということで、今、お手元にあるA3版、1枚のペー

パーにまとめさせていただきました。左側がこれまでのボランティア制度、右側が新しい考え方によるボランティア制度と考えております。

これまでも左のような、例えば学校と学生とが直接やりとりをするとか、学生さん個人と学校とのやりとりであるとか、そういう形の中で約2,000名の方がボランティアの登録もいただいて、動いてきていただいたわけですが、学校で見つからない場合は、市教委から登録いただいている学生さんの中で、学校にそれを御紹介する形もとってきていたわけですが、そして、また主に活動内容としては、左の図で支援の実施をしてきた内容としては、学習面もありますし、そしてまた環境整備、安全面の支援ということでありました。

これまでもこの制度によって、学校としては多くの効果もあったわけですが、ただ、課題の中で岡山市の課題である学力向上であるとか、問題行動等の防止に向けての取り組み自体は、そう多くはなかったと言えるのではないかと考えております。

さらには下に書いてある教師の負担軽減が十分でなかったり、学生さんが個々に動かれているものから、急に連絡がなくなったりするケースもあったのは確かです。学校にとっては、その都度、新たな方に来ていただくことになれば、学校の状況であるとか、依頼内容の説明であるとか、その説明に時間をとられてくる、少しそこに負担を感じるところもあったということでもあります。

また、急にと先ほど申し上げました。結局、意欲的に余り高くない学生さんもおられたということも課題として挙がってきておりました。

そこで、右側のようなものを考えています。新しいものとしては3点です。1点目は、左の上、「ここが新しい！」となっておりますが、学生さんのグループをつくる。グループの中に、教育委員会からの依頼に対して、誰が行けるかを探して調整をするとか、学校でのボランティアの経験のある先輩といえればいいのか、同僚などでもそういう経験のある者から学校での心がけるべきことであるとか、子どもさんに接するときにはどういふところを大切にしないといけないとか、そういう内容について学生さん同士の中でも守られるような仕組み。そして、急に行けなくなったときには、かわりの学生さんがすぐ手配できる仕組みも必要ではないかと、その中で学生グループをつくっていかうと考えております。

2点目は重点事項で、学力向上、問題行動、不登校等の防止についての内容について、それ以外のものも当然ボランティアとしてしていただければと思っておりますが、重点的

に今のような点について、さらに取り組んでいければと思っております。

例えば不登校ということになれば、学生さんが子どもさんの話し相手、相談相手になって、どういうところで行けなくなってるのか、年齢が近いことを利点にしながら話し合っ、それを解消する方向性を見い出すことができるのではないかと考えております。

3点目は、連絡協議会を組織してはと思っております。学生グループでの取り組み、また大学や市の関与、動きについての情報交換であるとか、どういう方向で持っていけばいいのか協議を行う連絡協議会を設置していきたい。岡山市の学生による支援のボランティアに協力をいただいている各大学であるとか専門学校、学生さん、保護者の方等々にも参加をいただきながら、このボランティア制度について共通理解を図り、また、今後のあり方についても、その都度、協議を進めていながら改善を図っていただけるような仕組みも考えてはどうかということでございます。

この仕組みをうまく動かしていくために、モデル校を挙げております。この仕組みがうまく回転していくかどうかを見きわめながら、全体に少しずつ広げていくことも考えていかなければならないだろうということで、モデル校で実施をしてみたいと思っております。

その効果として、子どもさんにとっては、子どもさんの持っている悩み、学習のつまずきに早く気づいて、細かい支援をしていく。また、学生グループ内での調整をして、状況を知ってる学生さんが続けて来ることができるようなこと。その結果として、学力向上、問題行動等の防止に効果を上げていきたい。

学校にとりましては、学生さんの力を借りることで、教師自身の負担軽減につながっていけばということもあります。学生さんにとっては、学生がみずから企画・運営することで、ボランティア同士のつながりがお互い高め合い、教育に対する、子どもを育てていくことに対しての意識を高めていく。結果として、学生さんのやる気を育んでいき、学生自身の学びを深めていければと思っているわけです。

中には、教師を目指していない学生さんも参加はされていらっしゃるんじゃないかと思えます。来ていただくことも期待をしたいと思えますが、その中で人と人とのコミュニケーション力であるとか、つながりを大切にできるような人づくりも、学生さんにとっては役立つことになるのではないかなと思っているわけです。

以上、岡山市が今、教育委員会として考えてみましたボランティア制度、新しいほう

についての説明を終わらせていただきます。

○市長 引き続き、同じテーマで、学校現場における学生ボランティアについて、ベネッセの西島さんから事例紹介をお願いいたします。

○ベネッセ（西島） ベネッセの西島でございます。

資料2をごらんいただければと思います。最初の数ページは、政令市、県庁所在地、もしくは中核市のような大きめの自治体さんの現状を幾つかレポートをしておりますが、全体としては、今、教育長から御説明のあった、左側のこれまでのボランティアのあり方とほぼ同じような形で、学生と学校とが話をしながら、もちろん教育委員会として登録をするという制度を設けながらやっているのが一般的な動きでございます。ですので、一つ一つ事細かには御説明申し上げませんが、幾つか特徴的なところだけを御説明申し上げたいと思います。

5ページ、さいたま市教育委員会様です。こちらは比較的教育委員会さんが主体となって動いているところになっております。一番大きなところは、学生さんの面談を教育委員会がされるところです。埼玉大学を加えた一部の大学は、大学で責任を持つからということで、大学推薦で面接はされていませんが、それ以外の学生さん、年間50名から100名くらいは教育委員会の方が面接をされて、どういう気持ちを持ってボランティアに来ているのかきちんと話をし、学生たちの特性を把握しながら、教育委員会が主体となって、ではこの学校にということでコントロールをされています。ここはほかのところと少し違う動きをされていて、教育委員会が主体となってやってらっしゃるところでした。

それ以外は、単位認定があるとか、あるいは交通費を支給しているなど違いはありますが、大体学校と学生とがやっている形でした。ですので、そこは割愛させていただきます。

これらのさまざまな地域での学生ボランティアをまとめたものが11ページでございます。

本当に多岐にわたってボランティア活動をしていますが、大きく4象限に分けて、2軸に分けますと、教科の学習なのかそうでないのか、あるいは縦軸の授業時間内なのか外なのかで分けましたところ、先ほどの例をざっと見ていきますと、多いのは右側です。教科学習にかかわるところ、授業でのサポート、放課後の学習、そういったところが非常に多くなっています。逆に左下、部活動ですとか遊び、見守り、挨拶、教育

環境整備は余りない感じで、どこの自治体さんもほぼ学力向上を目的にして学校ボランティア、学生ボランティアを募集しているという動きです。したがって、授業ですとか、授業外も含めて、教科学習のサポートをしてもらうという目的意識を持ったボランティアであると言えるかなと思います。

左側をやっているところももちろんありますが、左下の教育環境整備、窓を拭いたりですとか、溝掃除をしたり、そういったことは見つけられませんでした。

一方、次のページに岡山市様の現状です。2015年10月26日現在と書いておりますが、これは募集をされてる途上の数字ですので、現在はもっと数がふえているということです。少し状況が変わっているかもしれません。この時点での数字を拝見しますと、例えば小学校の表の中の下から2つ目、環境整備が5、あるいは中学校も環境整備が1とありますが、こういった環境整備を学生さんをお願いする自治体は、ほかでは見つからなかったという状況です。

やはり学力向上をという目的を明確にした上で学生を募集している。そこは少し岡山市様とは違ったかなと思っています。

政令市が全国で20ありますが、3つが不明だったんですが、残りの17の政令市の学校ボランティアを管轄している部署を見てみましたら、岡山市様は生涯学習課だと思えますが、生涯学習課で管轄されてるのは岡山市様と神戸市様、2つだけでした。あと、教職員課の系統が4つありまして、ここはいわゆる教師塾と連動させながら、その子たちが教員になれるための力をつけていくんだという意味を持って教育委員会がやっている。残り11は指導課系統でした。やはり学力向上を目指してやっているのが明確に出ているんです。目的意識を持ったボランティアの制度設計ができていのかかなと思っています。

そういう意味では、指導課としてやっていくところが多いわけですので、先ほど言いましたような溝掃除やガラス拭きなどは、恐らく地域の方には力を借りることはあると思いますが、学生ボランティアではないと思っています。

さいたま市様の例を出しましたが、埼玉県全国調査のデータは、この2年ぐらいでがんと落ちてしまってますが、さいたま市は落ちてないです。学生ボランティアのおかげかどうかはわかりませんが、決して学生ボランティアをやったから上がる下がるのではないかもしれませんが、さいたま市としては教育委員会がしっかりグリップすることで、しかも学力向上という目標を持ってやっているということで、学力はし

っかりキープしているという状況のようです。

そういったさまざまな動きが全国であります、13ページで、その中の課題を整理しております。

成果として、なかなかきちんと学問的にといいますか、科学的に検証しているのはいませんが、定性的なところでは、学校の反応も学生の反応も非常にいい反応が出ているのは、全体的にあるかと思えます。

一方では、課題もありまして、さまざまな連携や打ち合わせに時間がかかるですとか、告知が不徹底であるですとか、学校と学生のアンマッチ、学生としてはこういう支援をしたいと思っているのに、そういうことがなかなかできないですとか、あとは遠隔地にある学校にはなかなか学生が行ってこないですとか、さまざまな課題があつたりします。交通費も支給したい自治体はたくさんあるんですが、なかなかできないのが現状のようで、先ほどもありましたように、一部の自治体でしか金銭的な支援はできていないところでした。

下から2つ目、ボランティアという言葉に対する学生の拒否感が少し特徴的かなと思えますが、言葉を選ばず申し上げますと、たくさんの方が、多くの方ができることがボランティアだという認識もありそうな感じで、学生さんの気持ちの中に。自分は、例えば先生になりたいという気持ちや学校のためになりたいという志を持ってやっていっている、それはボランティアではなくて、ちょっと違うんじゃないかなという感覚を持ってる学生も多いようです。

振り返って、先ほどの事例を見ていただきますと、例えば4ページの山形市の場合は、スクールサポーター事業と呼んでいたり、また6ページの八王子市の場合は、「学校インターンシップ」事業と呼んでいたり、次の横浜市はアシスタントティーチャーと呼んでいたり、さまざまな名称がつけられています。この辺も学生さんにとって感覚的に入りやすい、入りにくいといったことがあるかと思えますので、今後、検討される場合には、ボランティアということよりも、もう少し学生たちが主体的に動いてるんだという名称にしていただけるといいかなと思っております。

最後のページ、先ほど教育長からもありましたが、学校ごとにさまざまな課題、学力向上や問題行動があるかと思えます。これまでの弊社から分析をさせていただいて提出をしてきましたデータの中にも、さまざまな学校ごとの課題、学校個別ではないですが、さまざまな課題が学校ごとにあることがわかっているかと思えます。

ボランティアをどういうふうに活用するかは、学校ごとの課題を明確にすることがまず第一かなと思います。それをやった上で、先ほどのさいたま市さんのように教育委員会としてマッチングをしていくことが、次につながっていくのかなと思っておりま  
すし、学生たちの力をしっかり引き出すためには、学生たちの気持ちをどう高めてい  
くかも並行しながら考えていかなければいけないのかなと思っております。

簡単でございますが、以上でございます。

○市長 今、教育長と西島さんからのお話に対して御質問、御意見をお願いしたいと思  
います。

なお、ベネッセの方も、議論そのものに参加していただければと思います。

あと、総務局長、教育委員会の皆さんも、きょうはどちらかという方向性を出して  
いこうということですから、御発言があればお願いしたいと思います。

○東條委員長 詳しい資料の御提示、ありがとうございました。

私は大学の教員でもありますので、学生を見ておりますと、学生の中にとっても温度差  
があるなど感じられることが多いです。非常に熱心で有能な学生もいる反面、有能だ  
けど、そんなという学生もいたりして、それらを一括してまとめた場合に、学生の  
集団がなかなか継続して成り立ちにくいんじゃないかなという実感も一方では持って  
いて、このような試みはとても大事だし有効だとも思いますが、そういう実感があ  
ることについて、ほかの都市ではどんな工夫を、学生の集団をまとめた状態で維持  
して続けていくことに関して、どんな工夫をされてるのでしょうか。

○ベネッセ（西島） 今回、いろいろ調べてみた中で、岡山市様の新しい案として学生グ  
ループが出ています。こういった運用をされているところは見当たらなかったです。  
学校と、教育委員会の介在の有無はあるにしても、個人の学生が動いていくとい  
うこととやっていました。

インセンティブは、やはり単位認定と、あとは教員になるときに、表現は別として、  
有利になるですとか、そういったインセンティブの中で動いているのが現実かなと思  
っています。

○東條委員長 学校支援ボランティアというか学生ボランティア、こういうタイプのやつ  
だけではなくて、例えばいわゆる学生サークルの維持に関して、どんなメカニズムと  
いうか、どういう要素があるとそれが続いていくのか。例えばサークルはいっぱいあ  
りますけど、泡沫的なやつもあったりするわけです。大学の中にもできちゃ消え、で

きちゃ消えとなつて、最初は同じような気持ちで始めたものが維持できないのが現状です。

この領域に関しては岡山大学でも幾つか、例えばさっき御紹介いただいた登下校の安全見守りに関してもありますが、あれも大分、下火になってきたりして、なかなか続かないところが難しいところです。

その中で、例えば私のほうで考えている新しいやり方、グループ内で人の手当てをしてもらおうということをやろうとすると、とてもその中のある特定の人に負担がいつて、やはり続かないということが起こりそうで。この部分に限らずで結構ですが、全国いろんなところをごらんになってると思いますので、学生サークルってどういう形で維持されることが多いんだろうか、素朴な疑問、もし御存じの部分があれば教えていただきたいんです。

○ベネッセ（西島） 余り学生サークルに接することがないので、学生に限らず、学校のいろんな取り組みも含めて見てみますと、やはり5年ぐらいすると何をするにしてもだんだん下火になっていく感じがするんです。新しい価値を常に発信し続けていかないと、次につながっていかない。恐らく5年もたつと時代も変わってくるし、子どもたち、学生たちの気持ちも変わってくるというのがあって、それが相まってよくない方向に行くと、泡沫的な感じになっていくんだと思うんです。

学生ボランティアが、最初はもっといい学校教育のためにという大きくりのことで、もしかしたら学生の心に響くかもしれませんが、その後、まただんだん多様化していく、多様化した上での価値が何なのか、それぞれ複数出していくですとか。新しい価値を常に発信し続ける、リニューアルし続けることが恐らく大事なのかなと思います。

企業で商品をつくったり、仕事してますが、10年全く同じ商品が売れ続けることもなかなかないので、リニューアルし続けることしかないかなと思っております。

○市長 いくつか質問ですが、まず第1に、教育長から左側、今、システムで学生の登録が2,000名という話をされました。2,000名は累積の登録ですか、それとも瞬間風速での登録になりますか。

担当の方で。

○事務局 瞬間風速で。

○市長 その2,000名は、市の教育委員会が依頼の連絡を②でされると書いてますが、この中で誰がいいんだろうかを考えて連絡するわけですか。



○事務局 しております。受付をして、そのときに教育委員会で指導をして、アドバイスをして、それから学校とも話をし、送り出しております。

○市長 わかりました。

あと、左側の学校園の下に、依頼に応じた支援の実施は、一番上はどちらかということと教育活動支援、授業保育の補助など書いてますが、右側の新しい学力向上に向けた取り組み、3つのポツがございますが、それとどういう違いがあるのでしょうか。

○事務局 今回は学力向上、それから問題行動にかなり特定した中で取り組んでいきたいと思っていますので、一人一人の生徒さんに向き合って、細かく丁寧にやっていくのが今回のねらいです。

○市長 今まではどういう視点だったということですか。

○事務局 マンツーマンで、いつも同じ人が来てくれるとか、そういった形で生徒さんに向き合って個別にやっていく、丁寧にやっていこうというのが今回のねらいでございます。

○市長 少し補足していただけますか。

○山脇教育長 これまでのものについては、多くの場合は放課後の補充ですか、子どもさんたちにもう少し力をつけてやろうというときに、入っていただくようなケースが多かったと思うんです。今回、新たに考えようとしてるのは、授業中とそこに書いてあります。授業の中に、学生さんが教えてる先生とともにチームを組んで、個々の巡回をしながら子どもたちのつまずきであるとか、学習面での相談にのる、その場でのっていくような形もとっていったらということも、今、考えております。

したがって、どちらも学力向上に向けてのものではあったんですが、特に右側は授業についても少し力を入れていきたいということで書いております。

○市長 ベネッセさんの資料の11ページを見ていただけますか。4分類でいきますと、Yイコールゼロというか、上側の部分、授業時間内での対応を、今までは授業時間外だったものを授業時間内に移行していく、そういう理解でいいわけですか。

○山脇教育長 授業時間外をオミットするという意味でもないですが、今までできてなかった授業時間内を加えていきたいということです。

○市長 では、学力向上という点については、時間外を否定するわけじゃないが、授業中に、これから積極的な役割を果たしてもらうことが新規だということですね。

問題行動に関しては、原則、これは時間外の話になるんですか。ここは変わらない理

解でいいですか。

○山脇教育長 いえ、時間外だけではなくて、やはり授業時間中も学生さんが、例えば問題行動、外で授業に入りにくい子どもさんに直接というのは、なかなかしづらい部分があるだろうと思うんです。そこも担当の教諭と一緒に動けるような形も含めて、特に私は、子どもと学生さんは一般教員よりは年齢が近いんじゃないかと、お兄さん、お姉さんのような役割をそこで果たしていただければ、いわゆる放課後だけではなくて、朝からでも行けるんじゃないかと。

○市長 ただ、不登校の場合、学校に来ないときに、家に訪ねて行ってやるところまで考えてるということですか。

これは従来の3分類でいくと、必ずしも問題行動についてサポートしてることではないような気がするんですが、そこは今まではなかったということでもいいわけですね。今までは原則、花植え、清掃、登下校時の見守りなどはやるにしても、学力の向上に関しては、授業外で補習授業などを見ていくようなことにとどまっていたものを、授業そのもの、いわゆる学校生活の根本に学生の方々が入って行って、学力向上、問題行動について相談、そして向上を図っていくと、そういう理解をすればいいということですね。

○山脇教育長 そうですね。当然、生活支援という面ではこれまでもありました。しかしながら、学力とって教科指導の面についての入り込み方は、今まで薄かったんじゃないかと思っています。そして、不登校のときの家庭へもというのも、そういう方向性も持ちながら検討できたらということですか。

○市長 その際の連絡協議会の役割は、どういうふうを考えられようとしてるんですか。

○山脇教育長 そこでどういう形をとっていけばいいのか、各大学、一律にそろえることはないのかもわかりませんが、お互いにどういうことなら可能であるかを、今、そこに挙げているような方とともに、岡山市なら岡山市の教育委員会が目指そうとしていることに対して、こういうやり方もできるんじゃないかなということも含めて、この中で提案をいただいたり、また共通理解を図って行って、それについて取り組んでみようという大学が出てくれば、そこについても取り組んでいただいたり。そこでの情報、こういう成果があったよということを教育委員会も把握しながら、お互いに出し合って共通理解を図っていくような形ができたらと思います。

○市長 これは学校ごとにつくるという意味ですか、それとも全て、岡山市全体で1つつ

くって、ここの運用についての何かをしていくという理解でしょうか。

○山脇教育長 今回の時点の考え方としては、それぞれの大学が幾つかあったら、それらをまとめるような形の中での連絡協議会ができたかなと思います。ただ、学生グループがどういう形でできるか、今、そこには同じ大学の学生という形をとってますけれど、話し合いの過程の中では、している支援グループごとにグループ化をしてみてもどうかとか、そんな意見も出てきてますので、これらについてはどういう形でやるべきなのかが、モデル校をやっていく中で少しずつ、こういうこともできる、こういうようなこともどうだろうかというものが浮かび上がってきて、そして、その連絡協議会の中でお互いの情報交換をしていく。そして整理できていけば、岡山市として統一的な捉え方ができるかもしれません。そして、それ以外については、統一しなくてもいいところは、その中で統一しなくていいという共通理解を図っていけばいいんじゃないかと。

○市長 スケジュールが入ってないですが、一体いつから。

○山脇教育長 なかなかあれですけど、まずは協議会を年度内にとするんです、27年度。ただ、そのときに全ての大学ということじゃなくて、まずは学生さんに、岡山市の教育委員会ではこういうことを考えてますよという説明会も兼ねて、立ち上げというか、そこに挙がっている大学の先生方とか保護者の方とか、どこまで呼びかけるかわかりませんが、学生さんたちにはまず説明会のような形をとりたい。

○市長 これは学生グループができなければ何も動かないですが、この前、大橋理事長、千葉理事長がいろいろとお話をされてたわけですけども、現在、学生グループを形成する芽みたいなものはできてるんですか。

○山脇教育長 これもお聞きすると、大学で多少違うんです。岡大はボランティアビューローですか、今、十四、五人の方がいらっしゃる。ところが、それが少し先細りになってきているということなんです。IPUさんにも少しそういうグループ的なものはあるということを聞いてます。それを、こういう考え方の中でグループ化ができないかということ投げかけていきたいと。

○市長 状況は今のよう状況ですが、何か御質問ございましたらお願いします。

○東條委員長 現状に関して、左側はこれまでの学生ボランティアという書き方になってますが、今、多分、岡大ですと学校支援ボランティアという紹介にしています。学生さんだけではなくて、地域の方も手を挙げた方には登録していただいているというふうに

なっていると思います。その方たちが地域のことを御存じですので、とても力になって  
るという面があると聞いてます。

新しい案の中に地域の方が入ってないことがあって、それはどういう意図なのか、数  
がそんなに多くないということがあるんですか。現状がどうなってるのか、どのくら  
いの地域の方が登録されていて、しかし実働はそんなにないとか、そのあたりはどう  
なんでしょう。

○事務局 全体で7,000人ぐらいの学校支援ボランティアがいらっしゃいます。そのうち  
の2,000人の方が学生ボランティアで、残りの5,000人の方は地元の方等でございます。

○東條委員長 そうすると、これはそれと切り離して、学生のみを組織化するという考え  
方ですか。

○事務局 そうです。並行しながら、両方動かしながら、その中で学生のグループ化を図  
りながらやっていくということです。

○東條委員長 そうすると、一般の地域の方は別立ての組織を考えられてるという意味で  
すか。残りの5,000人の方に関しては、今と同じシステムでやっていく。

○事務局 今までどおりの流れです。

○東條委員長 それは効率という点で、どんなことになるんですか。

○事務局 それぞれ問題点が違うと思いますので、先ほどありました教育環境支援や見守  
りであるとか、そういった部分については地元の方にもお願いしておりますので、今  
回の学生グループにつきましては、重点事項に特化した中で、なおかつ子どもさん  
について同じ顔がいつも見えるというのが1つのポイントでございますので、グループ  
の中で情報を共有しながらやっていただければいいのかなと思います。

○藤原委員 関連ですが、私も学生と地域のボランティアは役割分担したほうがいいんじ  
ゃないかなという気が最近しております。大学生のボランティアで、このところ大学  
の掲示板なんかにあるのは、例えば学校の木の剪定をしてほしいとか、いろいろ出て  
くるんです。学校のニーズは多岐にわたってるから応えてあげたいかなという気はす  
るんですが、それをやっていると、多分、学生のモチベーションが低くなるのかな。も  
ちろん得意な子もいるし、それでお助けしようという人もいると思うんだけど、ち  
よっと住み分けしたほうがいいのかなというのは、このところ思っております。

そして、先ほど教育長も言われた、スタッフがサークル的な活動を3年前から立ち上  
げてしたんですが、西島さんが言われたように、やっぱり年次的に少し落ちてきてる

んです。それは今の5年のスパンもあるかもしれないし、担当者を、私もその一員ではあるし、五、六人かかわってるんですが、例えば大学の部活動の顧問のような先生がいるような学生グループの立ち上げを各大学でお願いしたほうが恒常的に続くかなと。だから、学生も楽しみながら、やりがいを感じながら、サークル活動的なことでやるような下準備ができたらいいのかなと感じました。

もう一つは、岡山市の重点事項、これは今までこういうふうを示してなかったんで、これは特化できていいかなと。ただ、これは学生に示すのはあるんですが、もっとわかりやすくするためには、ベネッセさんが11ページで4分野に分けているところ、さらに教育課程内と外とに分けるとか、わかりやすい表で、大学生が、自分が将来こういう夢を持ったり、職業の希望があるから、じゃあ自分の力をここに出そうかというのがわかりやすい、結果として学力向上や問題行動に当たる。ただ単に問題行動や不登校への対応といったら、自分は学校へ出かけて行って、どの場面でどうやったらいいんだろうか考えた末に申し込まないパターンがあるんじゃないかと思います。

一方で、学校も余り複雑なニーズに応じてもらうようなことしてると、先生の対応が忙しくなるんですよ。じゃなくて、大学生は現役でこれだけの授業研究をしてるとか、教員になるための準備をしてる。これは自分ができる、先生もこれならそんなに説明しなくても任せられるという、シンプルな単純な構造にしていかないと、理想のニーズに全部応えていたら、多分また立ち行かないんじゃないかなという気がずっとしております。

以上です。

○ベネッセ（西島） 今のお話にかかわりまして、学生たちのモチベーションといったときに、やはり単位認定はすごく大きなモチベーションの1つかなと思います。現状は岡山県内の大学さんが、学校ボランティアに対して単位認定はされてるかどうか御存じでしょうか。もしないんだったら、例えば経済学部なんかですと、インターンシップが単位になるのは当たり前状態になってますので、教育学部系統では学校インターンシップは単位にするようお願いするのも当然ありかなと思うんですが、いかがでしょうか。

○塩田委員 今、学校インターンシップが出てきたんですが、ちょっと調べてみると、文科省が2017年以降に学校インターン制度を必修化してやると言われていると思うので、そこの住み分けをどうするのかと、ちょっと感じていました。

それと同時にうちの大学の例でいきますと、教職課程を取っておられる方、教育学部では学校インターンシップを既に単位化しております。そこで伺ったんですが、問題となっているのは、インターンだと限られた日にちで、限られたことをして終わってしまって、それが単位になってくる。その後、学生が継続していきたいと思っても、そこが途切れてしまう。そういった窓口があるのであれば、それは非常にありがたいことですというお話も聞いております。

ですから、インターンシップを経験した、現場を経験した学生さんたちが、引き続きそういうモチベーションを持って学校現場に出ていくことができれば、それは非常にいいことかなと感じます。

もう一つ、学生グループの「ここが新しい！」ですが、この図は本当に回り出したら非常にいいシステムだと思いますが、車輪を回すのものすごいエネルギーが要るかなと思っています。そのキーポイントになるのは、下にあります大学等にかかってくるかと思っています。

1つの例で、ボランティアの募集といいますと、E S Dのボランティアの募集に少しかかわらせていただきましたが、そのときもビラを置くだけでは誰も注目をしませんでした。学生課に頼んで、学校内で説明会を開いていただきました。そうしますと、予想以上に多くの学生が集まりました。私は説明だけしてフォローはしてなかったのですが、終わった後に学友会といいまして、クラブ・サークルを統括しているところの副会長さんから参加をさせていただき、非常にいい経験をさせていただいて、ありがとうございましたというメールが来ました。

内容がすばらしかったので、E S Dの担当者の方にも転送させていただきました。そこでわかったことは2つあって、1つは、潜在的にボランティアをやりたいと思ってる学生は非常に多いこと、それから説明会を手伝ってくださった職員の方が学友会に呼びかけをしてくださっていた。そこで意識の高い人たちが実際に説明会に来てくれて、ボランティアに参加したことがありました。

ですから、ボランティアをやりたい学生に対して、やはりキーパーソンといいますか、そこでは学生課の職員さんだったのですが、そういった方たちが声かけをして、意識の高い人たちが来てくれて、こういうサークルを立ち上げていってという形になっていくのかなと思います。このようなわけで、大学がどうかかわっていくか、非常に大きなポイントかなと思っています。

○東條委員長 今回の単位のことに関して言いますと、御説明ありましたように、岡山大学では2011年度の入学生から必修単位化してるんです。4年生の前期が必修単位になってます。4年生の後期が選択必修単位になってますので、前期は全員もちろん取りまです。280人いますから280人取るんですが、私、たまたまその学校インターンシップという単位の立ち上げるときの担当をしてたので、自分のところの学生の尻をたたいて、後期もちゃんとやれよって言ったら、280人のうちに後期登録した学生は10人に満たなかったんです。私のゼミの学生が半分を占めてるといふ惨状で、どうなってるんだろうなと思って、単位は余りそういう魅力にならないのかなと思ったという覚えがあつて。それは1つの要素なんで、それプラス何か必要だったのかもしれないなど、例えば教員が今みたいに後押しするとか。単位を出すのでやるというふうには、単純にはならないだろうなという感想を持っています。

それは経年で見ても、多分、後期に登録してる学生はずっと1桁です。280人のうちの1桁ですから3%程度しか、いわゆるボランティアにやらないのが実情になると、その3%の学生に、ここで言う、グループ内での調整という負担がかかってくことになるだろうなと思うので、そこら辺の運用は、そこだけではなく、何かほかの形のシステムも合わせてやらないと、なかなか崩壊していくところはとめにくいかなという印象を持っています。

全体としてはいい話だと思いますが、特定の人に負荷がかからないようにしないと、それは続かないことになると思いますので、もうちょっと検討なり工夫なり、あとは協議会が年度内にとということでしたので、例えばボランティアサークルのトップの人に、どこが難しいですかねと単純に聞いて、何があったらみんなやるんでしょうというお知恵をいただきながら組み上げていかないと、なかなか続く話にならないかなと体験的に感じてるところです。

○市長 インセンティブというか、そういう動機づけをするために何をすべきかというのは、大学側とは話をされてますか。

○事務局 3大学ぐらい回らせていただいたんですが、今おっしゃったような単位の話がされてるところもございました。それから、認証を与えてくれという話もありました。それから、教職員試験の際のインセンティブみたいな話もございました。今後協議会を立ち上げて、学生さんのニーズといいますか要望みたいな話を聞きながらやっていくのかなと思っております。

○山脇教育長 先ほどのインターンシップもそうだったんですけど、それまではボランティアで、インターンシップが導入されてから学生さん、ある面ではボランティアへかける意欲ですか、そういうものが少し低下したんです。結局そのことによって現場での状況、様子、子どもたちの接し方がインターンシップの中で自分自身もわかるようになってきている。

したがって、単位を与える、もしくは何かインセンティブを与えることは必要なんだろうなとは思いますが、それを余りにも過重にしてしまっていて、それによっていけば何かのいい面があるから行こうやという意識に学生さんがなってしまうと、ボランティアという意識自体からすれば、余りいい方向に向かないんじゃないかなと。しかしながら、何らかのものはこの中で考えていくことによって意欲が高まっていくということであれば、それは考えていかないといけない。

先ほどの、例えば採用の場面で、何か自分たちのしてきたことを訴える場面があるとか、そういうことについては少しまた考えるところがあったりする。だけど、単位自体については、大学さんがどう考えるかということにもなるんだろうかなと思うんです。どういうものがいいかは、今後も少し練っていかないといけないのかなと思っています。

○藤原委員 関連して、多分インセンティブということであれば、単位をもらうことよりも、もっと意欲感を感じたというほうが上かなと思う場面が、岡山市さんが年に1回、学校支援ボランティアのシンポジウムをされてるんです。そこには、岡山県内というか主に市内に大学がある6校か7校かぐらいのボランティアの参加者が集まって、自分の経験談を言う。受け入れ先の学校の先生が来て、それを少し膨らませて言うとか、そういう会に寄せてもらおうと、やっぱり学生がきらきらしてるんですよ。

そういう活動が、例えば学生グループができたときに集約するような、もうちょっと高い理想の楽しみ方があるとか、充実感があることが広まるようなイベント、あるいは組んでいくことで学生も育つのかなという感じがしております。

だから今後、ちょっと形が変わるかもしれないですが、そういう活動は欲しいなと思いました。

○市長 右側の図の中で、モデル校を中心に実施と書いてます。幾つかのモデル校での実施は、いつを考えられてるんでしょうか。

○山脇教育長 できれば来年度です。学生さん、まず連絡協議会の中で整理を少しできた



ところについては、やっていけることがあるんじゃないかと思います。ただ、どういう学校にしていくのが一番いいのかなということも、ちょっと考えないといけないかなと。

例えば先ほど言っていました、市内の中でもなかなか今、行けてない学校がある、北のほうであるとか。そこへ行くのがいいのか、それともこれまで経験されてるところへ行くのがいいのか、幾つかの視点を整理した中でモデル校を決めていかないといけない。モデル校で何をするかというと、このシステム自体がうまく回るのかどうなのかと、そこはきちっと検証できるようなことを考えないといけないだろうなと思います。

整理ができれば来年度、早くから幾つかやっていきたい。

○市長 教育長の考え、私も同じように考えます。この連絡協議会で今のような、モチベーションをどうつけていくのかとか、多分いろんな議論が出てきて、そう簡単にまとまらないこともありますので、やりながら考えていくことしかないのかなと思います。だから、モデル校を何校選ばれるのか、幾つかのバリエーションを持たせて、選んでいただいて実施しながら、今、先生方がおっしゃったような問題を協議会という中で整理をしていく、そしてベネッセさんは整理していただいた各地の状況なども、そういったところでも参考にしながらやっていくことがいいんじゃないかなとも思うんですが、どうでしょうか。

○東條委員長 私が答えなくてもよかったのかもしれませんが、やはり新しいことを始めるときは、走らせながら手直しして考えていくことをするしかないだろうなと思います。そのときに、先ほど西島さんから御指摘がありましたように、魅力を常に更新して発信していくようなことは、事務局で意図してないといけないことで、何となく日常に埋没してしまうことがありますので、ちょっとあざとい言い方ですけど、売り文句というか、売りをいかにして発信するかが最大のインセンティブになるんじゃないかと。

先ほど、集団の維持に関して御意見いただいて、私もそれはそうだなと思っていました。単位認定云々は個人のモチベーションの問題ですが、集団をどう維持するかということに関していうと、そういった魅力あるところにコミットしてるのが、多分一番大きなインセンティブになると思いますので、それを市教委だけじゃなくてもいいですが、協議会の中でもみながらつくり上げていく。最初から多分完成形はないので、大分うまくいかないことは、先ほど申し上げたような危惧は、現実になることはある

と思います。やりつつ、その年度の中で修正をすることはしないといけないかなと思います。

要望があるとか、大学でもやってみたいという御意見、大橋先生ですとか、千葉先生からいただいたりしてますので、なるべく動かしてみても、やらずに難しいというよりは、やってみて、もうちょっとうまくやるにはどうすればいいかという方向で考えるのが建設的なんだろうなと思っています。

○市長 どうぞ。

○藤原委員 制度設計をするときに、今、西島さんからいい資料を出していただけてますが、例えば表形式にするとかすれば分かりやすい。有償ボランティアでやってるところ、無償でやってるところ、交通費があるとか、保険は多分どこでも出てるんだと思うんですが。指導の補助の分野であるとか、一覧のようなのがあると生かしたいかなという気になる。全部記述で、読めばもちろんわかるんですが、内容がいろいろな感じがするので、ほぼ一緒と言いながらちょっと違う。

例えば校外学習の付き添いもオーケーのところは、どういうふうを考えておられるのかな、今、岡山では校外学習は不可能ですよ。可能ですか。

○山脇教育長 保険の中で、交通費のことであるとかが解決できればね。

○藤原委員 そのあたりを学校内に限ってるのか、校外学習はオーケーなのか、宿泊もオーケーなのか、細かいんだけど、そういうことで他都市がやってて、なおかつボランティアをやってる人がキープできてるようなところは、何の工夫があるのか知りたいなと思いました。

○東條委員長 社会科見学とかついて行ってますよ。

○藤原委員 社会科見学はあるんですか。

○東條委員長 発達障害の子について行ってると。

○市長 塩田さん、どうですか、何かありますか。

○塩田委員 私も進めていって、その中で改善をしていくことが重要かなと思います。

それから大切なことは、学生はボランティアに行く気持ちがあっても、行って何をしたいかわからないのが一番つらいところなので、その意図をしっかりと学生に説明をしてやっていただくことが大切かなと思います。

○市長 教育委員会、総務局から何かございましたでしょうか。

○事務局 最初からきれいな形は難しいと思うんです。それで協議会を立ち上げて、議論

して整理していくのが現実的だろうと思うんです。

それと、今まで市の教育委員会でも学生ボランティア、2,000人いらっしゃって、かなりの人が活動してくれてるんだらうと思うんです。そうすれば、各学校が何を期待してるかもある程度類推できるし、学生はどんなことをしてきたという、そのデータも分析して提示すれば、学生にもイメージが湧きやすいし、各学校はこんなことを求めているよというセールにもつながっていくと思うんです。そういうところから手をつけていくのも方法かなと。

それで、学生グループが学校園に行く人を調整することを担うんですよね、ここでは。そこが大学自体の支援もいただきながら、そこがうまく機能するようにどうしていくかが1つのポイントかなと思ってるところで、モデルでできるところからやっていく、皆さん委員の方のそこには賛成して、やりながら考えていくしかないのかなという感想です。

○市長 初期の段階は①から⑥までの、こういう時系列にはなかなかかならないかもしれませんが、逆に言うと、教育委員会のリーダーシップでもって、とりあえず数校を動かしていただく。今、山脇教育長から、来年度にもというお話もありましたし、幾つか積極的に対応してみようという大学もあるので、そういうところをお願いして、来年度動かさせてもらって、あわせて連絡協議会等々でモチベーション等々について整理をしていく。

ただ、お願いするには、塩田さんがおっしゃったように、何をするのかよりクリアにしておかないとだめだという気はします。重点事項の書いているイメージだと、私の最初の質問のように、この4分類の中のどこを指してるのかさえよくわからないところがあるので、何を学生にお願いするか明確にさせていただいて、学生もそういう意識を持っておいてもらう必要があるんだらうということでもあります。

そして、西島さんがおっしゃったように、学生が、我々は一体何をするんだらうというところはネーミングによって大分変わってもきますから、ネーミングを、仮のでもいいと思うんですが、つけてやっていただいたほうが良いような気がします、どうでしょうか、教育長。

○山脇教育長 そうですね、やはりボランティアという広いです。ですから、学生さんをお願いをする内容がもう少しわかることも含めて、1つに絞るわけじゃないんですが、包含できる何らかの形は学生さんに示すことが要るのかなと。

それと、これまでのものにプラスした教科学習ですか、時間内でのものまで含めてになれば、これまで学校としては、そこまで多分余り意識してないんだろうと思うんです。だから、そういうこともこれを含め考えていますよと現場にも知らせていかないといけないだろうと。それが今後の市教委の調整にはなってくるのかなと思うんです。それをやっていかないと、今までどおりで、ただ学生のグループができましたよだけで終わったんではいけないだろうと。

もう一つは、インセンティブというときに、個々の学生のインセンティブはちょっと今、お話が出てましたけど、グループのインセンティブですか、これは何が一番、先ほどつないでいて、5年で新しい価値をとということもあつたんですが、新しい価値以外にも、何らかの継続できるものを学生のグループへのインセンティブとして与えることができれば、少し継続もし、その中のリーダーも育ってきて、つながっていくのかなと思うんですけど、何かいいアイデアありませんか。

○ベネッセ（西島） 価値が上がっていくという意味で、例えば学生は、最初は本当に自分がやるだけで精いっぱいかもしれませんが、ちゃんと情報をためていきなさいですか、ためたものをちゃんと発信できるようなサイトをつくりなさいといったら、学生だったら多分すぐつくれると思うんです。次に発信することで、またいろんな情報が集まってきたりするし、学生自体に何か力がつくような仕組みも、余りお金かけずにおまえらでやれというくらいでもできると思うので、そういう道筋を示してあげるのが大事かなと思います。

あとは、最初は挨拶だけだったんだけど、次は授業の支援ができるようになった、次はICTの支援ができるようになった、次は英語の支援ができるようになったとか、学生の成長とか組織の成長みたいなのも描いておくといいのかなと。継続性というか、次はこうなってみようという気持ちが学生たちに芽生えて、新しく立ち上げるときって、やっぱり学生も気合いが入りますけれども、それがなれていくと、第2世代になっていくと、だんだんしぼんでいきますので、常に何か新しいものを立ち上げていくんだというものを提供してあげるといいですか、道を見せてあげる。最終的にはみずから考えてほしいんですが、ある程度、道は見せてあげたほうがいいかなと思っています。

○市長 ネーミングの話ですが、ベネッセさんの資料を見させてもらおうと、全体的にスクールサポーターとかアシスタントティーチャー、学校サポートとか、いわゆる先生、

学校をサポートするもの、そういったものが何か本質的なものとして見ている。それでよければ、そういうたぐいのものになるのかもわかりませんが。例えば生徒のために考えていくのであれば、またちょっと意味が違ってくる。

今回やろうとする学生ボランティアの本質って一体何なんだというところにかかってきます。最終的には、いい人材に育ってくればいいという、教育そのものの問題のような気もするんですが、今回の学生ボランティア事業の本質は、一体何を我々は目的としてるのかという点についてはどうでしょうか、何か御議論ありますか。どなたでも結構ですが。

○事務局 繰り返しになりますが、生徒さんの学力向上、それから問題行動、このあたりに焦点を当てていきたいということでございますので、学校と生徒、学力、このあたりがポイントになるかとは思っております。

○山脇教育長 学校から見れば、当然、今の子どもに焦点が当たってくるだろうと思えますし、今、重点として上がってきてるのもそうだろうと思うんです。今回のボランティア制度については、学生さんが持っている力をいかに上手に出していくか。出していくかというとよくないかもわからないけれど、学生さんはそもそもそういうものを持っている。それを引き出すこと、また学生さんのアイデアが生きるボランティア制度ですか、それが今回の岡山市が今考えようとしているボランティア制度になってくるのではないかなという気がします。

○東條委員長 多分、今の御質問は、最大の受益者が誰かということにかかわることかなと思います。重点項目としてはこうなただけでも、結局、学生さんたち、言い方は失礼ですけど、ツールとして入ってくださる学生さんたちや、あとは地域の方ですが、その方たちの力で子どもたちが学びやすくなるとか、あるいは教室に入りやすくなって、なじみやすくなると、それを後押しするためのツールの提供だろうと思うので、一番このことで得をするのは子どもなんだろうと思います。ですので、シンボリックなネーミングというお話がありましたけれども、もし仮に名前をつけるとすれば、そういったことが含まれたものである必要があるだろうと思うんです。

これは仮の案なんで、これはこれでいいと思いますが、それも含めて、それこそ学生さんはいろいろアイデアを持ってて、我々なんかが見つからないようなことをひょっとどうまいこといたりするので、協議会で何ていったらいいかねみたいな話を聞いてみてもおもしろいかなと思ったり。我々の学部のサイトですとか、教室のサイトも、

学生がこういうの入れたほうがいいですよというほうがおもしろくなったりするので、そういうのも入れながら、さっきのお話ではないですが、走らせながら、その中に今の話を入れてもいいのかなと、何となく聞いてて思いました。

○藤原委員 学生にとっては、やることはすごくシンプルでわかりやすく、でも、志は高いという学生が育てば、ものすごい理想だけでも、岡山市がよくなるのかな、例えば成人式なんかにもいい効果があらわれるのかなと思いました。そのときに、大学にそれぞれ学生グループが立ち上がったら、ぜひ、市として応援してるよということで、少しの活動費を委託のような形で差し上げたらいいのかなと思って。

何に使うかといったら、大学と大学の代表の人たちが交流するときに、いろんなことで活動費になる。本当にわずかでもいいから、ボランティアが有償というのは、ちょっと私もそれは余りふさわしくないなと思うんですが、サークル的な活動を大学がすると、市から委託されて活動しているんだというのがわかるような、ほんのちょっとでもいいからそういうものがあればいいかなと思いました。

○市長 私も同感であります。とりあえずネーミングについては、今の子どもたちのために、生徒のためにという要素と、やっぱり学生をツールとしたという要素を入れ込んだ形でのネーミングを少し考えていただいて、また連絡協議会の場でもっと最終案は御議論をいただければなと思います。

全体としては、こういうことを4月、来年度からやっていくことは、きょうの総合教育会議でも、大きな方向性は確認したということでよろしいですね。

では、とりあえず意見は出尽くしたような気がいたします。事務局に返してよろしいでしょうか。

○司会 ありがとうございます。

以上で、平成27年度第7回岡山市総合教育会議を閉会いたします。お疲れさまでした。